

2018 年 7 月 8 日（日）「とりなしの共同体」

マタイ 18:18-20

18 まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。

19 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。20 ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

【序論】

本年度に入り、およそ4年ぶりに祈祷会を再開することができました。皆様のお祈りに支えられて、長かった私の闘病生活も終焉を迎えております。現在この祈祷会には、水曜日の朝か晩の時間帯で、それぞれ6～8名の方が集っておられます。賛美、御言葉の分かち合い、祈りという一般的なスタイルではありますが、この聖徒の交わりの中心に主イエスがおられることを感じるひと時です。

今日の箇所の主イエスが言っておられる「**ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです**」（20 節）という御言葉は、私たちの祈りを励まし、主イエスへの信頼を与えます。そのままこの言葉を信じて祈ることが許されているでしょう。それと同時に、私たちはここからもう一度祈りの基本に立ち返り、主が叶えてくださる祈りとはどんな祈りであるかを学び取りたいと思います。

【本論】

今日の箇所を敢えて分解してみますと、18 節は「（天と地で通ずる）つなぐ、解く」の問題、19～20 節は「心を合わせた祈り」となります。しかし、本来はこの箇所は独立したものではなく、15～17 節の「罪を犯した兄弟への段階的な悔い改めの促し」の内容とつながっています。ですから、本当は 15～20 節をひとまとめに語る必要があったのですが、内容的に重要な点が多かったため、敢えて分けたという次第です。まず念頭に置いていただきたいことは、「悔い改めの促し」という文脈上に今日の箇所があるということです。

本論 1. 「つなぐ」と「解く」

まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。
のです。(18:18)

ここに「つなぐ (δέω)」「解く (λύω)」という二つの動詞が出てきます。少々ニュアンスが掴みにくい内容ではありますが、「つなぐ」とは「禁じる」、「解く」とは「赦す」という意味で捉えておけばよいでしょう。より分かりやすく言いますと、「つなぐ」とは有罪宣告(縛る)、「解く」とは無罪宣告(解放する)という意味です。罪を犯した兄弟に対して、教会は最終的な判断が委ねられている。もし罪を悔い改めない場合、教会はその兄弟に有罪宣告を下さなくてはなりません。反対に、悔い改めている兄弟を無罪とし、交わりに戻ってきってもらう宣言をすることもできます。

地上の教会に、これほどの権限が与えられているのは畏れ多いことではありませんか。この権限がどこから来ているかと言えば、それは主イエスの御名によるのです。実は、これとほとんど同じ内容が 16:19 に出てきました。

わたしは、あなたがたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。
います。

これはペテロ個人に向けて言われていたことではありますが、今日の箇所ではその権限が教会レベルに拡大されている。地上の教会は確かに罪ある人間の集まりではありますが、それだからといって何の判断もできない集団ではないのです。罪は罪として裁く権限が与えられている。また、赦しを宣言する権限も。

一例として、ペテロが実際に罪を裁いている箇所を見てみましょう。使徒 5 章に出てくる、地所の代金を偽ってささげたアナニヤ・サッピラ夫妻を断罪する場面です。

- ・ 「そこで、ペテロがこう言った。『アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。』」(使徒 5:3)
- ・ 「そこで、ペテロは彼女に言った。『どうしてあなたがたは心を合わせて、主の御霊を試みたのですか。見なさい、あなたの夫を葬った者たちが、戸口に來ていて、あなたをも運び出します。』」(使徒 5:9)

この二人の夫婦は、バルナバの大胆な献げ物を見て、自分たちも会衆に賞賛されたいという虚栄心が働いてしまったのでしょう。自分たちの土地を売り、その一部だけをささげ、「これで全部だ」と偽りました。そのことがペテロに聖霊によって示され、彼は二人を罪に定めたのです。

この出来事から分かることは、教会が何らかの裁きを下さなくてはならない時、それは天において既に決定されている審きを聖霊を通して聞き取り、それを地上の教会で宣言するということです。一見、地上で決められたことは何でも天でも適用されるかのよう聞こえる言葉ですが、この御霊の示しがなければ地上の教会は何事も判断することができません。

毎月、役員会をスタートする時に、私は「人間の思いではなく、一人一人に霊的知性が与えられるように」と祈るようにしています。役員が判断することが、この世的価値観に基づくものであれば、教会は霊的共同体ではなくなっていくでしょう。それゆえに、語られる一つ一つの言葉が聖霊によるものとなることを祈り求めているのです。

本論 2. 御心に適う祈り

19～20 節は、本来この話の流れの上で語られています。二人、三人が集まって祈る事柄とは、聖霊によって導かれた祈りでなくてはなりません。そして、この文脈では第一義的に「つまずいた兄弟のための祈り」なのです。

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。(18:19)

文脈上に置きますと「どんな事でも」という言葉がやや限定的に聞こえてくるでしょう。私たちはここで、「御心に叶う祈り」というものをもう一度捉え直したい。私たちが知っているように、祈ったことのすべてが実現するということではありません。祈る内容によっては、神はお答えにならないこともあります。「聞かれない祈り」を理解するために有用な例話がありますので一つご紹介します。

「私たちがしばしば祈りについて持つ疑問は、『祈りは聞かれるのか?』というものでしょう。以前、家族でキャンプをしようと車で出かけたとき、途中で大雨になりました。すると子どもたちが後部座席で、『神さま、雨をとめてください!』と必死に祈りはじめました。しかし、雨がやむ様子がないのを見て、『お祈りしても神さまは全然聞いてくれないよ』と子どもたちは言うのです。そこで私はこう言いました。『もしかするとキャンプをやる場所の近くの農家の人たちは、ずっと農作物のために『雨を降らせてください』とお祈りをしてきたのかもしれないね。神さまは今日、その祈りを聞くことにされたのかもね。』¹。

神は人間一人一人の必要を知っておられ、それを与えるべき時期もご存知です。それ

¹ 大嶋重徳『朝夕に祈る主の祈り』いのちのことば社、2017、p. 12-13

は必ずしも私たちが願うすべてと一致していないかも知れません。

しかし、どんな時にも御心に叶う祈りがあります。それは、罪を犯した兄弟（姉妹）の回復を求める祈りです。主は私たちのとりなしの祈りを切望しておられます。しかし、とりなしの祈りとは何と難しいものでしょうか。私たちは罪を犯した人が悔い改めに導かれるように、どれほど真剣に祈っているか。むしろ、その人を軽蔑する心が湧いてきて、陰でヒソヒソと噂話を始めてしまうようなことはないか。もしそのような心が先行していた場合、私たちが表面的に祈るとりなしの祈りは聞かれないでしょう。私たちが祈る時、モーセのような、パウロのような、そして主イエスのような、滅びゆく人々への真実の愛が求められているのです。

- ・ そこでモーセは主のところに戻って、申し上げた。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら--。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」（出32:31-32）
- ・ 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。（ローマ9:2-3）
- ・ シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。（ルカ22:31-32a）

本論 3. 心を合わせた祈り

とりなしの祈りは、複数の信徒の集まりの中で、それも心を合わせて祈られる時に、力をもって神の許に届けられます。

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中からです。（18:19-20）

「二人」「三人」というのはグループとなりうる最小限の人数のことです。ここで集まる人々は、18章の流れで考えるならば、「小さい者たち」を指します。誰の目にも留まらないような存在に見えるクリスチャンが、主の御前に集まり、心を一つにして祈るとき、そこに大きな力が加えられていく。その集団の真ん中に主ご自身がいてくださるからです。

私が結婚した頃、当教会ではまだ祈祷会が立ち上げられていませんでした。私はいつも一人で祈っていたのを覚えています。ですが、妻がこう言ってくれたのが忘れられません。「ここに祈りの友が来たよ」「まずは二人で祈祷会を始めようよ」と。

祈りの最小単位は夫婦、親子、兄弟と言えるかも知れません。幼い子どもと自分の二人であったとしても、共に祈るならば、一人の時には味わい知ることのできない主の臨在を実感することでしょう。インドネシアのボルネオに宣教師として遣わされたA先生と奥様は、医療機関の皆無に等しい場所でマラリヤに罹り、生死の境を彷徨いました。そのとき、幼かったお子さんたちが小さな手を置いて一生懸命に祈ってくれたという証が載せられています。

「やっとの思いで家にたどり着いた主人は、すでにベッドから降りられるほど回復した私を見て、主を賛美しました。幼いN子やMがいつも水や果物を持って来ては『ママ、早く元気になってね』と言って小さな手を合わせてお祈りしてくれました。この小さな祈りは、高熱に苦しみつつ望郷の念で朦朧とする私にとって、どれほど大きな信仰の励ましになった事でしょう」²。

家族の最小単位の祈りに留まらず、教会における少人数の祈りをも主は喜んでくださいます。その祈りが、信仰に基づくものであり、主イエス・キリストの御名により、神の目的と一致しているならば、神は答えてくださるでしょう。祈る人が立派でなくても、大人数でなくても、「小さい者」が集まるところの祈りを神は喜び、聞いていてくださいます。

そして、主イエスは最後に「わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいる」と締めくくられる。これはまさしく、ご自分をインマヌエルの神と宣明する主イエスのアイデンティティです。信徒が集まって祈るところには、神ご自身、主イエスご自身が共にいてくださるのです。

【結論】

私たちの日頃の祈りはどのような内容でしょうか。私たちは本当のとりなしの祈りをささげたことがあるでしょうか。願わくは私たちも、モーセ、パウロ、そして主イエスのように、滅びゆく人々のために祈れるようになりたい。自分自身の願い事ばかりでなく、碎かれた魂をもって隣人を愛し、その人が救われるように、罪の赦しが与えられるように、祈り求めたいと思います。この教会が「とりなしの共同体」として、主イエスと共に立つことができますように。

² 安海靖郎／通子『信仰と希望と愛〈南十字星のもとにて〉』一粒社、1997、p.123-126

【祈り】

教会に祈りを求め給う主よ。私たちのこれまでの祈りは、御前にどのように聞こえていたのでしょうか。その大半が自分の願望を並べ立てるものであったことを恥じます。あなたが求めておられるのは、滅びゆく人々のためにとりなしの祈りです。それも、二人三人が集まって祈る姿を喜ばれます。この教会を「とりなしの共同体」として導いてください。私たちの祈りの本質をどうか変えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

全能にして、救いの御業をなすために、人の祈りを求め給う、父なる神の愛。

「小さき者」の祈りを蔑まず、その集まるところに共にまし給う、主イエス・キリストの恵み。

祈りの本質をつくり変え、教会を「とりなしの共同体」と整え給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを